魔法のプロジェクト FY23 活動報告書

報告者氏名： 塚本 理恵　所属：広島県教育委員会 個別最適な学び担当不登校支援センター
記録日：2024年 2月 29 日
キーワード： 不登校 つながり 相談する力　強みを知り生かす力 学習意欲

【対象児の情報】
・広島県教育支援センター（愛称：SCHOOL“S”）（以下、SCHOOL“S”と示す）を利用する児童生徒

【活動目的】
〇当初のねらい
ICT 機器を活用して、
(1) 他者とつながるよさを体感させる
(2) SCHOOL“S”が居場所となった児童生徒に対して、学習意欲をかき立てる
(3) 低学年児童の学習への意欲の基礎をつくる
(4) 読むこと、書くことに困難さのある児童生徒に対して機器の活用を促す
〇実施期間
・ 2023 年9月～2024年2月
〇実施者と対象児童生徒の関係
・ SCHOOL“S”利用者と、スタッフ（支援者）

【広島県教育支援センターについて】
〇 支援内容及び利用状況
・ SCHOOL“S”への来室による利用、自宅等からオンラインによる利用または、来室とオンラインを併用した利用など、実態や状況等に応じて利用
・ 通室1日平均 30 名程度、オンライン 20 名程度利用（2024 年2月末現在）
・ 毎日の利用、毎週〇曜日など定期的な利用や単発的イベントへの参加など利用状況は児童生徒によって異なる
〇 育成したい力
・ 相談できる力
・ 自分の強みを知り生かす力

【活動内容と対象児童生徒の変化】
〇 対象児童生徒の事前の状況
・ 全体を通して、自己肯定感が低下傾向、コミュニケーションスキルの不足、学習意欲が低下傾向、読んだり書いたり計算したりすることに抵抗感のある児童生徒が多い
・ オンラインによる利用の児童生徒の中には、自宅等などから外出し他の場所で活動することが困難な児童生徒もいる
・ 各学校より配付された一人1台端末を持っているが、学校外で常に利用している児童生徒は、少ない。PC、タブレット端末や携帯電話、スマートフォンなどの自身のデバイスを使用して、個々で過ごしている
〇 活動の具体的内容
(1) 他者とつながるよさを体感させる
【児童生徒とスタッフ、児童生徒同士のやりとり】

・ Zoom を活用した、オンラインでのやりとり

・ Google workspace のクラスルーム等を用いたやりとり

(2) 居場所となった児童生徒に対して、学習意欲をかき立てる

・ ICT 機器の使用を絡めた探究活動の実施

(3) 低学年児童の学習への意欲の基礎をつくる

・ pepper を利用した学習体験から、次の学習へとつなぐ

(4) 読むこと、書くことに困難さのある児童生徒の機器の活用を促す

・ iPad や自身の端末を活用した支援

○ 対象児童生徒の事後の変化

(1) 他者とのつながるよさを体感させる

・ Zoom を活用した、オンラインでのやりとり

毎日、Zoom を利用し、オンライン配信をしている。教科等の内容だけではなく、季節の事項や、旬な話題を提供したりする中から児童生徒とのコミュニケーションを図っている。カメラ、マイク OFF の状態だが、対面では、表出することが難しい児童生徒も、チャット機能を使用して、相手に伝えたいことを表出することができている。日々、新しい利用者が増えていく現状でも、長く利用している児童生徒が、チャットで【名前の変更】を教えたり、リアクションボタンで応援するなど、お互いを思う姿が見られている。「今まで、話すことが苦手だったけれど、安心して参加ができる。」という感想があった。

また、来室でのイベントや畑での活動の様子を中継し、来室の様子をオンライン利用の児童生徒と共有することで、「行ってみたい。」と感じた児童生徒が来室するという事例があった。

・ Google workspace のクラスルーム等を用いたやりとり

クラスルームを作成し、スライドで、日々の振り返り等を行っている。スタッフと児童生徒とは、限定コメントでやりとりができるようにしている。利用児童生徒の中には、対面では、スタッフと話しをするときに堅さが見られるが、日々のオンラインでのチャットでのコミュニケーションを経験したことで、「言うことは難しいけど、コメントでなら相談ができる」とチャットで学校生活や進路についての相談をすることができた。

(2) 居場所となった児童生徒に対して、学習意欲をかき立てる

・ ICT 機器の使用を絡めた探究活動（プロジェクト）の実施

SCHOOL“S”を利用し、居場所として定着した児童生徒に対して、次のステップに進むために、ICT 機器を絡めた探究活動を実施した。児童生徒自らが「やりたい。」と感じさせられるように、学習の必然性を作りながら支援をした。

＊ 料理プロジェクト

「何か料理にチャレンジしたい。」という声から、インターネット等で材料を調べる、また、仲間を募るために、Google クラスルームで発信し、フォームを活用して、参加者を募った。また、成果物をクラスルームで発信し、他の児童生徒も「やってみたい。」という、声があがり、次へのつながりができた。

＊ SCHOOL“S”紹介プロジェクト

「SCHOOL“S”を見学する人が多い。」「みんなに SCHOOL“S”を知ってもらいたい。」という声から、動画を作成したり、Google スライドを用いて新聞を作成したりし、視察者に視聴してもらったり、や研修等で活用したりした。

＊ pepper 活用プロジェクト

pepper は、第2のスタッフとして、毎日、「あいさつ運動」アプリを起動し、児童生徒の通室・退室を見守っている。児童生徒から、「自分で pepper を動かしてみたい。挨拶を作ってみたい。」という声が出て、時期に応

じた様々な挨拶を作成した。
また、ある生徒からは、「通室の記録（今は手書き）を入力するとき、pepper を使用して利用者の負担を軽減したい。」との声が出て、プログラム作成にチャレンジした。結果、活用するまでには至らなかったが、日々の環境を pepper を活用して、周りの友だちのために活用してみようという意欲が見られた。

(3) 低学年児童の学習への意欲の基礎をつくる

pepper は、毎日、通室する児童生徒たちを迎える位置に配置している。「あいさつ運動」アプリを起動し、朝の挨拶や、休憩時間の連絡、片付け、帰りの準備を児童生徒に報告してくれる。また、急なpepper の声掛けや誘いに対して児童生徒たちも楽しそうに関わっている。その関わりの中で、特に低学年の児童が、スタッフと一緒に学習アプリを起動させ、一緒にチャレンジしている。慣れている環境下で、問題を一緒に行うことをきっかけとし、文字に興味をもち、絵本等を読んだり、ゲームを通して、数を計算する姿が見られるようになってきた。また、自ら、自身の端末に入っている所属学校から付与されている学習アプリを起動させて、行う姿も見られた。活動の中で、文字や計算を活用する姿が多くなってきた。継続的な支援までは、至っていないので、次への支援が必要であると考えている。

(4) 読むこと、書くこと等に困難さのある児童生徒の機器の活用を促す

SCHOOL“S”内で、読んだり書いたりすること等で困難さを抱えている児童生徒に対して、自立活動のような指導・支援ができたらよいと考え、当初のねらいを計画した。しかし、実際には、実施することが難しかった。このことに関しては、次に示す。

- 児童生徒にとっては、SCHOOL“S”が安心安全な居場所という、支援の素地はできたが、学習支援までには至らなかった。
- 読んだり書いたりする等の困難さに対して、学校との連携、活動や日々の振り返りの記録等の把握にとどまってしまった。その理由として、SCHOOL“S”で過ごすに当たって、学習上又は生活上の困難さを感じる環境が少なく、それを作る環境づくりができなかったと考えられる。

【報告者の気づきとエビデンス】

○ 今年度の成果と課題

［成果］

- ICT機器は、対面でコミュニケーションを図ることに対して困難さのあるオンライン利用の児童生徒に対して、ファーストステップのツールとして、活用できた。内言語を表出する経験を通して、他者とつながったり、相談したりということができた。
- pepper は、活動のきっかけに活用できたと感じる。
- 児童生徒の「やりたい」に寄り添ったプロジェクトを通して、その際に必要な ICT 機器の活用について支援することはできた。

［課題］

- 児童生徒にとって安心安全な居場所とするための支援に ICT をどう活用するか、学習上又は生活上の困難さを改善・克服するため支援に ICT をどう活用するかを児童生徒の実態に応じて、使用する機器や使用する支援内容を考える必要がある。
- 学習上の困難以外にも、人との関わり方や自己の考えの整理をする時間が必要な児童生徒がいる。来室の児童生徒と、人とのつながるよさを今以上に感じてもらうために、ICT機器の有効な活用をさらに研究しながら、支援内容を考える。